

新たな J A 共済 3 か年計画のスタートに向けて
「組合員・利用者とともに歩み続ける J A 共済 ～協同の力で広げる安心の輪～」

ＪＡ共済３か年計画（令和７年度から９年度）では、共済事業のすべての活動において、「組合員・利用者本位の事業運営」を基調として取組みを展開するとともに、総合事業機能を発揮した「組合員・利用者との関係性強化・仲間づくり」を実践することを基本的考え方として、組合員・利用者の豊かなくらしと活力ある地域社会の実現に貢献し続けてまいります。



JAと連合会が一体となった
主たる取組み事項の着実な実践

令和7年度 基本方針

- 1 組合員・利用者を第一に考えた寄り添った活動の実践
- 2 寄り添った活動の情報を利用したお届けする活動の展開と体制の構築
- 3 J A共済地域貢献活動による「新たなJ Aファンづくり」の取組み
- 4 デジタル技術を活用した利用者の利便性向上
- 5 「J Aにおける共済事業実施体制整備指針」に基づく組織・要員体制の構築
- 6 建物共済支払査定迅速化・適正化
- 7 損害調査サービスにおける契約者対応力の維持・強化

JA共済連青森

フラッシュ

JA 青森



蟹田小学校田植え体験学習（6／3）

JA 青森管内の外ヶ浜町立蟹田小学校5年生児童12人が参加した田植え体験学習が行われた。児童たちは、水田を管理する上小国集落協定の皆さんに教えてもらいながら、泥まみれで作業を進めていた。参加した児童は「緊張したけど、どんどん楽しくなった。ありがとうございました」と感謝の言葉を述べた。

JA ぎょつがる



小玉スイカ現地栽培講習会（6／18）

JA ぎょつがるの野菜振興協議会は、五所川原市で小玉スイカの現地栽培講習会を開き、今年の生育状況に合わせた栽培の注意点を確認した。

定植後、5月中旬の夜温が低下したことが影響し、生育状況は一週間ほど遅れている。講師を務めた丸種の月森敦之さんは「焦らずに根づくり、樹づくりをしてから着果させるように」と説明した。

JA 相馬村



わい化栽培夕方青空教室（6／9）

相馬村わい化栽培技術研究会は、県リンゴ剪定士を講師に招き「わい化栽培夕方青空教室」を開催した。

今回研修した園地は、今年2月に剪定セミナーが開催された園地と同じため、剪定した木のその後を見ながら摘果作業ができた。

研修に参加した女性部の中嶋副部長は「剪定セミナーは参加できなかったが、同じ園地で剪定と青空教室がセットで行われることで、剪定の経過を目の当たりにでき、今後の作業について分かりやすく学べた」と話した。

JA つがるにしきた



人手不足解消へ JAがマッチング（6／4）

JA つがるにしきた農作業従事者無料職業紹介所は、働き手を募集している農家と農業で働きたい方のマッチングを行っている。求職者の登録前に農業体験を行っており、今年度はつがる市のリンゴ園地で摘果体験を行い、男女8人が参加した。

初めて参加した女性は、「どの実を残すか悩んだが、園主が丁寧に教えてくれたので分かりやすかった」と話し、体験後、8人全員が求職者登録を行った。

JA つがる弘前



組合員の声に耳を傾けます（6／5）

JA つがる弘前では、5月下旬から、リンゴの生育状況確認と2025年産リンゴの入庫促進の園地巡回が始まった。組合員との対話を重視するため、園地に出向く指導や巡回を強化している。

岩木支店では営農系の職員に、支店窓口業務を担当する職員も加わり、定期貯金や農作業中の怪我などの保障、融資商品の情報も提供している。

貯金担当と営農系の職員は、岩木支店リンゴ部会会員とともに園地を巡回し、農作業中の組合員を激励した。

ＪＡ津軽みらい



作業時期を守り適切な管理を（６／３）

ＪＡ津軽みらいぶどう生産部会は、ＪＡぶどう生産販売対策協議会が開いた栽培講習会に参加し、適切な栽培管理について学んだ。

青森県中南農林水産事務所農業普及振興室の職員が講師を務め、「スチューベン」と「シャインマスカット」の生育状況や栽培管理について説明した他、作業を行う時期をしっかり守るように呼び掛けた。

生産者は「講習会で学んだことを守って今後の作業を進め、品質の良いブドウを生産したい」と話した。

ニンニク収穫本格化（６／２１）
全国トップクラスのニンニク生産量を誇るＪＡ十和田おいらせ管内で、ニンニクの収穫が本格化している。干ばつの影響でやや小ぶり傾向だが、品質は良好。ＪＡでは適期収穫と乾燥時の徹底管理を呼び掛けている。
十和田市藤坂の竹ヶ原義仁さん（４９）は、「土づくりやミネラル栽培など他産地に負けないほどこだわりを持って栽培している。品質や味も自信があるので、ぜひ味わって確かめてほしい」と自信をみせる。

ＪＡ十和田おいらせ



ＪＡゆうき青森



キャベツ講習会（６／１１）

ＪＡゆうき青森野菜振興会キャベツ部会は、東北町の圃場で栽培講習会を開催した。生産者７人が参加し、品種の特性に合わせた栽培方法や収穫時期を確認した。

講師の㈱トーホク 松原部長は「積算温度が高くなり、収穫期間は短くなる可能性がある」と指摘。収穫時期が遅れると病気やチップバーンが発生しやすくなるとして、気温に注意しながら収穫作業を進めることを呼び掛けた。

ＪＡおいらせ



小学生が長いも選果施設見学（６／４）

三沢市立上久保小学校三学年は、社会科の授業で三沢市谷地頭にあるＪＡおいらせ長いも洗浄選別施設を訪れ、春掘りナガイモの選果作業や施設を見学した。

宮古係長は、児童らにナガイモが箱詰めされる前の行程を見せながら、「海外にも出荷している」と説明すると、児童は驚いていた。また、児童からは仕事のやりがいや農協の仕事、出荷時期などについて質問があり、地域農業への理解を深めた。

ＪＡ八戸



ねぎ専門部 栽培講習会（６／２～３）

ＪＡ八戸ねぎ専門部は、管内４カ所でネギ栽培講習会を行った。

三八地域農林水産事務所農業普及振興室の木下貴文主幹が講師を務め、定植後の栽培管理と病虫害対策について説明した。講師は「生育はほぼ平年並み。生育に遅れがみられる圃場では、葉面散布剤を活用し生育促進に努めること」や「培土する際には、焼け症状や軟腐病が発生しやすいため、高温時や降雨後には控え、早朝などの涼しい時間帯に行うこと」を説明した。

全国から災害見舞金が贈呈される

東北5県中央会

東北5県の各JA中央会会長より6月3日、今冬の記録的豪雪で被害に見舞われた青森県の農業復旧に役立ててもらおうと、JA青森中央会に豪雪被害に対する災害見舞金が贈呈された。

岩手、宮城、秋田、山形、福島の会長らが東京都内でJA青森中央会の乙部輝雄代表理事会長に目録を手渡した。5県の会長らは「被災された方々にお見舞い申し上げる。役立ててほしい」と激励。乙部会長は「感謝申し上げます。農家組合員のための有効に活用したい」と謝意を述べた。



▲乙部会長（右から3人目）に見舞金を贈った5県の会長

全国共済農業協同組合連合会

全国共済農業協同組合連合会は6月4日、JA青森中央会に豪雪被害に対する災害見舞金を贈呈した。

青森市にある県農協会館で、全国共済農業協同組合連合会の小野雅彦常務理事がJA青森中央会の乙部輝雄代表理事会長に目録を手渡した。



▲目録を受け取る乙部会長（左）

小野常務理事は「被害にあわれた皆さまの復旧支援のために役立ててほしい。一刻も早い復旧を心より願っている」と話し、受け取った乙部会長は「頂戴した見舞金は、各JAを通じ被災された農家の再建のために、大切にに使わせていただきたい」と述べた。

全国農業協同組合連合会

全国農業協同組合連合会は6月9日、JA青森中央会に豪雪被害に対する災害見舞金を贈呈した。

青森市にある県農協会館で、全国農業協同組合連合会の桑田義文代表理事理事長がJA青森中央会の乙部輝雄代表理事会長に目録を手渡した。

今冬の雪による農業被害は約215億円。このうち、リンゴ枝折れ被害は約202億円、野ネズミなどによる被害が4億円弱、農業関連施設への被害は5億円超、畜産関係被害が2億円超などとなっている。



▲目録を受け取る乙部会長（左）

JAグループ全国機関8団体

JAグループ全国機関8団体は6月11日、JA青森中央会に豪雪被害に対する災害見舞金を贈呈した。

青森市にある県農協会館で、全国農業協同組合中央会の藤間則和常務理事がJA青森中央会の乙部輝雄代表理事会長に目録を手渡した。

藤間常務理事は「被災地の方々が1日も早く復旧・復興し、リンゴをはじめとしたおいしい農畜

産物が消費者に届くことを願う」と話した。

受け取った乙部会長は「見舞金は農家の再建のため大事に使う。災害の規模が例年より非常に大きいため大変ありがたい」と述べた。



▲目録を受け取る乙部会長（左）

農林中央金庫

農林中央金庫は6月13日、ＪＡ青森中央会に豪雪被害に対する災害見舞金を贈呈した。

青森市にある県農協会館で、農林中央金庫篠田崇常務執行役員がＪＡ青森中央会の乙部輝雄代表理事会長に目録を手渡した。

篠田常務は「お役立てください」と話し、受け取った乙部会長は感謝の言葉を述べた。

今冬の大雪では、青森県においても農業用ハウスの倒壊や、リンゴなどの果樹の枝折れなど甚大な被害が出た。見舞金は県内ＪＡを通じ、被災農家の支援に充てる。



▲目録を受け取る乙部会長（右）

国消国産の懸垂幕掲揚

ＪＡ青森中央会は6月2日、「国消国産が日本の食の未来をつくります」「子どもたちの未来に食の安心をつなぐ国消国産」と書かれた懸垂幕を県農協会館壁面に掲揚した。

国消国産は、国内で食べる食料はできるだけ国内で生産し、地域の農業や食文化を守ろうとＪＡグループが提唱しているスローガン。ＪＡ青森中

央会では、国消国産を消費者に対し広くＰＲする目的で懸垂幕を掲げている。

今年度は11月下旬まで継続して掲げる予定。



▲掲揚された懸垂幕

青森県ＪＡ女性組織協議会・県大会と研修会を開催

県ＪＡ女性組織協議会は6月9日、青森市の青森県農協会館で2025年度県ＪＡ女性大会と夏季研修会を開催した。県内各ＪＡ女性組織や事務局から約100人が参加。松橋久美子会長は「これからますます農作業が忙しくなる。熱中症対策を十分に行ってほしい。また今日は限られた時間であるが、大いに学び、たくさん笑って楽しんでほしい」とあいさつをした。

組織活動体験発表お披露目会では、ＪＡ津軽みらい女性部尾上支部の工藤れい子さんが「趣味を活かして仲間とともに」と題し活動を発表。同女性部の部長を2年務めた経験などから、仲間づくりの大切さや一緒に活動する楽しさをたくさんの写真と合わせて伝えた。工藤さんは「女性部としてさまざまな活動をし、多くの方と交流を持つことができた。この思いをたくさんの人に繋げていきたい」と語った。工藤さんは8月に行われる東

北・北海道地区ＪＡ女性組織リーダー研修会で、県代表として発表する。

研修会ではＮＰＯ法人青森県防災士会の三浦一郎事務局長を講師に招き「もしもの災害に備えて」をテーマに講演、またスカンディアモスアート認定講師の葛西樹里さんによるモスツリー作成のワークショップが行われた。



▲組織活動体験発表お披露目会で発表した工藤さん

令和7年度第1回営農指導事業meeting開催

ＪＡ青森中央会は6月20日、青森市の県観光物産館アスパムで「令和7年度第1回営農指導事業meeting」を開催した。

このミーティングは若手、中堅の営農指導員や営農部門職員を対象に、営農指導事業における課題や問題意識を可視化し、課題解決に向けた実践的な提案を学習する場として設けている。今年で3年目の取り組み。今年の年間テーマは「営農指導員の負担軽減に向けた業務体制」とし、課題解決する力と、考えを上司に上手く伝える力を養うのが最終目標。1年かけて全4回ミーティングを実施する。初回となる今回は、青森県内のＪＡから5人が参加した。

酪農学園大学農食環境学群循環農学類の正木卓准教授と、弘前大学農学生命科学部の林田大志助教を講師に招き、農協の役割や日本の農地の特徴、営農指導の在り方、経営、産地づくりの観点から見る地域営農支援の構築などに関する講義を行った。

講義後、グループワークにより、営農指導員が行う現在の業務の棚卸しや、効率化が必要な業務について話し合った。特に繁忙期の人手不足や、業務分掌には明記されていない「見えない業務」への関心が高かった。また各参加者の業務の割合について、ワークシートで業務を洗い出し、エクセルを使いその場でグラフ化、そのうえで講師から質問や講評を受けた。

次回は8月下旬を予定している。



▲グループワークの様子

令和7年度第1回きらきらサークル研修会開催

青森県ＪＡ女性組織協議会は6月23日、青森市の県農協会館で組織強化・拡大を目的とした「きらきらサークル研修会」を開いた。午前と午後に1回ずつ実施し、県内ＪＡ女性組織部員、地域住民、ＪＡ職員ら65人が参加した。

研修会では「ポーセラーツでとっておきのお皿づくり」と題し、青森市でポーセラーツサロンoliveを主宰しているＳＡＯＲＩさんを講師に、お皿づくりに挑戦した。

ポーセラーツとは真っ白な磁器に転写紙、上絵の具などを使って絵付けをし、電気炉で焼成するクラフトのこと。体験では白磁の小皿にシールタイプの転写紙を貼り、絵柄やバランスを考えながらオリジナルの小皿を作成した。

参加者は「初めて作成したが、初心者でも簡単に作れる。とても楽しめた」と話した。

次のきらきらサークル研修会は7月30日に開催を予定している。



▲講師のＳＡＯＲＩさん（左から2人目）

農業高校とＪＡの連携事業 2025年度も実施

ＪＡ青森中央会では青森県内の農業高校と、高

校所在地域のＪＡとの連携事業を展開している。

本事業は、農業高校とＪＡ青森中央会との意見交換会で取り上げられた話題をきっかけに取り組み始めたもの。ＪＡ職員による仕事内容の説明や、施設見学などにより高校生の地域農業に対する理解を深めることが目的。ＪＡの地域貢献活動やＰＲ活動の一環とするほか、高校生が就職活動をする際にＪＡを選択肢に入れる足掛かりとしても着目している。高校側もＪＡについて学びきっかけとなることや生徒が卒業してから社会人として働く環境を実際に体感できると期待を寄せている。

連携活動を始めた2021年は青森県立三本木農業恵拓高等学校とＪＡ十和田おいらせの１組のみであったが、徐々に活動を広げ、24年には青森県内の農業高校全４校と連携が実現した。現在、「青森県立五所川原農林高等学校とＪＡごしょつがる、ＪＡつがるにしきた」、「青森県立柏木農業高等学校とＪＡ津軽みらい」、「青森県立名久井農業高等学校とＪＡ八戸」で連携活動を実施している。

25年度も各農業高校で継続して実施を予定している。今までに参加した高校生からのアンケートを基に、より充実した活動となるよう計画。スマート農業の取り組み事例の紹介や今まで見学をしていなかった施設の見学、もう一步踏み込んだＪＡでの職場体験学習などを検討している。



▲昨年の施設見学の様子

若手職員への研修会開催

ＪＡ青森中央会は6月20日、青森市の青森県農協会館で「仕事の振り返りから始まる私のキャリア成長プラン」と題した研修会を開催した。対象者は入組して2、3年目の県内の若手ＪＡ職員で、24名が参加した。この研修会は今回が初の取り組みで、モチベーションとエンゲージメントの向上、これからのＪＡ職員として、自信を持って勤務することの支援を目的としている。

研修では株式会社Ｉ・Ｍ・Ｓ代表取締役の三上友子氏を講師に招き、仕事の目標の立て方や今後

のキャリアビジョンについて学んだ。また参加者には事前にＪＡに勤務する中での不安や悩み、疑問についてアンケートをとり、可能な範囲で講習会中にアドバイスを話した。講師の三上代表取締役は「本日の研修を通じて、皆さんが自身のキャリアを主体的に考え、行動するきっかけとなればと思う」と話した。



▲講演を受けている参加者

行事（7／10～8／10）

7月

- 10日 常勤監事会議（ホテル青森）
- 14日 県連代表者と県青協・県女性協役員との意見交換会（ホテル青森）
- 15～17日 認証初級準備研修会（県農協会館、Web）
- 15日 組織再編検討会議 専門部会【県南・購買】（ＪＡ十和田おいらせ 本店）
- 18日 2025国際協同組合年青森県実行委員会立ち上げ（県農協会館）
- 22日 津軽地区ＪＡ協議会定例協議会（弘前市）
- 24日 臨時総会（県農協会館）
- 24日 臨時理事会（県農協会館）
- 25日 組織再編検討会議 専門部会【津軽・購買】（ＪＡ青森 営農経済本部）
- 29日 人事考課者研修会 Ⅰ（県農協会館）
- 29日 営農指導員資格認証指定研修会（県農協会館）
- 30日 第2回きらきらサークル研修会（県農協会館）

8月

- 7日 定例理事会（県農協会館）

ローン担当者会議の実施

農林中央金庫青森支店は、5月28日にローン担当者会議を実施した。8 J A 18名が参加し、意見交換を行った。

主な会議内容としては、2025年度のローン目標達成に向けて、重点取り組みであるハウスメーカー営業に加え、金利上昇局面のなかで重要となる借換推進・防止の対応について説明。そのほか、ローンキャンペーンの効果実証や J A 内稟議のシステム移行にかかる機能概要の説明を行った。

また、青森県信用基金協会より各種情報提供があったほか、会議の最後には、J A にとって有益な情報提供手段として重要視される審査書類の書き方について意見交換が行われた。



▲ローン担当者会議の様子

ライフプランサポーター養成講座の実施

農林中央金庫青森支店は、6月19、20日に2025年度ライフプランサポーター養成講座の第一部を実施した。7 J A 9名が参加した。

ライフプランサポートとは、ニーズに寄り添った提案型セールスを実践することで取引深耕をはかるための取り組みであり、J A におけるライフプランサポートのけん引役となる人材の育成を最大の目的としている。

当日はライフプランサポーターの役割やリーダーシップ理論、提案型セールスのマインド・スキル、信頼関係構築の方法等を講師が解説し、4グループに分かれグループワークを実施した。

グループワークでは、窓口リーダーとしての指示の伝え方やお客様からの信頼関係構築のための対話方法等を共有し合い、より実践的なロールプレイングの実施を通じて学びを深めた。



▲ライフプランサポーター養成講座の様子

行事（7／10～8／10）

農林中央金庫

7月

- 10日 青森県 J A 信用担当部課長会議（＊）
- 15日 窓口年金推進研修（＊）
J A バンク青森運営協議会専門委員会（県農協会館）
- 17日 不祥事防止実践研修（＊）

8月

- 7、8日 資産形成研修（知識編）（県農協会館）

農協電算センター

7月

- 16、23日 窓口端末機操作研修（情報系）（県農協会館）
- 24日 臨時株主総会（県農協会館）
臨時取締役会（県農協会館）

8月

- 7日 定時取締役会（県農協会館）

（＊）はウェブ会議

やさい・花き取扱会議の開催

JA全農あおもりは5月27日、青森市の県農協会館で令和7年度やさい・花き取扱会議を開いた。

近年は、農家の高齢化や後継者不足、労働力不足に加え、流通経費の増加や生産資材価格の高止まりなど農産物の生産・販売に関わるコスト増嵩が進んでいるため、生産農家所得の向上に向け、高温や大雨などの気象変動に対応した生産技術の実証や優良種苗の安定供給、出荷形態・規格の見直しによる作業軽減に取り組む。また、各生産部会への販売提案の強化、家庭内需要の拡大に向けた消費喚起にも取り組んでいく。他にも輸出や、流通コスト抑制に向けた物流体制の構築などについて協議した。

会議では各JAから消雪の遅れと、春先の天候不順から県内全般に生育は遅れ気味であると報告された。

やさい部の坂本浩部長は、「生産者の高齢化などで耕地面積が減少しているが、生産振興を含めて県内JAとともに共販率の拡大に努める。増嵩する流通コストについても、生産者が納得する価格で販売するよう尽力したい」と述べた。



▲挨拶をする坂本部長

リンゴ病害虫防除現地研修の開催

JA全農あおもりは5月27日、「りんご病害虫防除現地研修」を（地独）青森県産業技術センターりんご研究所で開催し、県内JAの購買・営農担当、県関係機関、青森県りんご協会など、約30名が参加した。

JA購買・営農担当がともに知識向上を図り、

現場で病害虫の発生状況を確認して生産者への防除指導に活かすために開催した。

研修では、りんご研究所内の試験園地において担当者から、黒星病やナシマルカイガラムシなどの病害虫について、実物を観察しながら特徴や生態について説明があった。

その後、現在発生中および今後発生が予想される病害虫について学び、病害虫の効果的な防除に向けて生態を把握することや時期別に効果的な薬剤選択をすることなど説明を受けた。

また、県りんご協会から、「病害虫防除の指導にあたり、現場での実物の確認や自ら作業を経験するなど、使命感をもって取り組んでほしい」と助言があった。

参加者からは、「購買と営農と一緒に学ぶ貴重な機会のため継続してほしい」、「実物を確認できたことを今後に活かしたい」などの感想が出ていた。

全農あおもりは、生産者の高品質安定生産に向けた購買・営農担当のスキルアップに向けて今後も取り組んでいく。



▲所内試験園地で病害虫を観察する参加者

やさい・花き共販大会の開催

JA全農あおもりは6月12日、青森市で、令和7年度「やさい・花き共販大会」を開いた。全国取引会社や県内関係者ら221人が出席し、事業経過や取扱対策について確認した。

令和7年度共販目標額を300億円とし、内訳はやさい294億円、花き6億円。

品目別に見ると、ながいも80億円、にんにく52億円、トマト21億円などに設定し、必達に向けて

実績を積み上げる。

重点実施策として、ながいも・にんにく・ごぼうの系統共販率の向上や気候変動に対応した生産技術の実証、各取引先との連携による有利販売の実践、ながいもの輸出拡大、効率的な輸送体制の確立などを掲げた。

全農あおもりの乙部輝雄運営委員会会長は「近年の異常気象の影響を受け、栽培体系や品種の見直しが必要と考えている。また物価高騰による節約志向や遠隔地である本県の物流体制など喫緊の課題があり、対策が急がれている。各取引先の協力を得ながら、課題を解決し、機会の創出に取り組む」と述べた。

また、系統共販拡大に尽力した取引会社12社（青果8社・花き3社・加工1社）を表彰した。



▲開会の挨拶をする乙部会長

J A肥料農薬新人スキルアップ研修会の開催

J A全農あおもりは6月18日、青森市の県農協会館でJ A肥料農薬新人スキルアップ研修会を開き、県内J Aから担当者らが34名参加した。

参加者は、肥料と農薬の基礎知識として、肥料に含まれる成分の働きや分類、農薬の剤型や散布方法などについて学んだ。

また、本所耕種資材部九州営農資材事業所金田晋二上席主管からは「組合員との接点強化」について、自らの実体験を交えながら店舗での総合対策や、接客方法について説明があった。

全農あおもり購買部肥料農薬推進課の須藤雅樹課長は「購買窓口に来られる農家・組合員のニーズを理解し、迅速かつ、的確に対応していくことが必要となることから、今回の研修で得た知識を生かして欲しい」と呼びかけた。

研修会は県内J Aの購買窓口担当者を対象に毎年開いているもので、来年2月にも開催を予定し

ている。



▲基礎知識を学ぶ参加者



行事（7/10～8/10）

7月

- 3日 令和7年度主要やさい販売要請会議（アジュール竹芝）
- 4日 令和7年度主要やさい販売要請会議（ANAクラウンプラザホテル福岡）
- 9日 運営委員会（農協会館）
- 18日 毒物劇物取扱者試験講習会（農協会館7階 大会議室東側）
- 18日 J A-L Pガス保安講習会（県農協会館）
- 23～24日 J A-S Sスタッフ講習会（㈱エコー本社・三本木SS）
- 25日 第51回青森県花の共進会（青森県観光物産館アスパム）
- 26日 あおもりフラワーフェスティバル2025（青森県観光物産館アスパム）

8月

- 7日 運営委員会（農協会館）

J-SMILE研修会「長期」編の開催

JA共済連青森は6月5日、県農協会館にて新任スマイルサポーターを対象としたJ-SMILE研修会「長期」編を開催した。

本研修会は、長期共済のLAへの情報連携にかかるマインドの習得と長期共済提案プロセス（対人スキル）を理解し、効果的なお客様対応の実践を目的に行われた。

研修会はロールプレイングを取り入れた実践的な内容で、参加者の取り組む姿勢と、研修で得た知識とスキルを今後の業務に活かそうとする意欲が伝わってきた。



▲動画視聴も交えた研修

LAステップアップ研修（推進マインドデザインコース）の開催

JA共済連青森は6月10日、県農協会館にて2年目LAを対象としたLAステップアップ研修「推進マインドデザインコース」を開催した。

本研修会は、共済事業の意義・やりがいを認識し、お客様にどうお役立ちできるかについて様々な着眼点を持つことで、お客様にとって付加価値のある推進活動へ繋げるための心構えを醸成することを目的としている。

参加者は、お互いに自身の推進活動に対する着眼点や考えについて意見を交換し合い、講師からの問いかけにも積極的に応じる様子が見られた。



▲グループ討議をする参加者

J-WAYS修得編

JA共済連青森は6月17日、県農協会館にて新任LAを対象としたJ-WAYS修得編を開催した。



▲参加者は自身の取組姿勢を真剣に振り返っていた

本研修会は、推進活動の意義や仕事に対する取組姿勢の再確認、および推進スキルを定着させ推進活動の質の向上を図ることを目的に行われた。

研修会では自身のLAとしての活動全体を振り返り、計画的な活動、活動管理について学ぶなど、必要な知識を吸収する姿勢が参加者から伝わってきた。

スマイルサポーター交流集会の開催

JA共済連青森は6月24日、ウェディングプラザアラスカにて、スマイルサポーター交流集会を開催した。

本集会はスマイルサポーター同士の交流を通じて活動事例を共有し、スキルアップを図り今後の活動に活かすことを目的に開催している。

開会にあたり福田副本部長が挨拶し、『LAを陰で支えながら、組合員・利用者からの強い信頼と期待を得ているスマイルサポーターの皆さんこそ「JAの顔」だと認識している。他JAの方々と交流を深め、「気づき、ヒント」を得て欲しい』と述べた。

参加者はグループディスカッションを中心に、各テーマごとに意見交換をしながら、自身のスキルアップにつなげる取組や考えを共有し、共通の課題を持つスマイルサポーター同士で意欲的に交流している様子が伺えた。



▲明るい雰囲気の中で交流を深めた

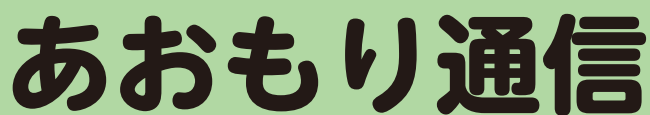
行事（7/10～8/10）

7月

- 11日 支店管理者交流集会（ホテル青森）
- 16日 JA共済ヘルスアップ講座（プラザマリユウ五所川原）
- 18日 JA自然災害調査員養成研修会（県農協会館）
- 24～25日 JA審査員養成研修会 生命コース（県農協会館）
- 25日 JA共済きずなの青い森プロジェクト（平内町）
- 28日 LA交流集会（フレアージュスイート）

8月

- 6～8日 JA審査員養成研修会 建物コース（県農協会館）
- 7日 運営委員会（県農協会館）



TEL : 017-775-2151

— 農林水産省からJA関係者へ情報発信 —

あなたの農山漁村（むら）の宝を教えてください



組 織 農 政 通 信

第 1 回県下 J A 青年部長・事務局合同会議

青森県農協青年部協議会は令和 7 年 5 月 30 日、J A 青森中央会第 1 会議室にて、「第 1 回県下 J A 青年部長・事務局合同会議」を開催し、J A 県青協役員、各 J A の青年部部長、事務局担当者らが参加した。本会議では、今後の青年部活動に関わる重要な課題について、意見交換がなされた。

近年青森県では農業従事者の減少や高齢化、豪雪などの自然災害や鳥獣被害の増加など、様々な課題が深刻化している。このような厳しい情勢の中、令和 7 年度の J A 県青協年間活動計画の方針として、活動の目的を再認識し、青年組織自らの経営や生活を守りながら地域農業の振興、組織強化や活性化に努めると共に、「国消国産」を訴え、国産農畜産物の推進、消費者の理解醸成に取り組んでいくこととしている。そのため、年間活動計画では、県連代表者や県選出国會議員との意見交換の場の提供が含まれており、青年部員の資質向上と地域農業の発展のために多様な取り組みを実施することとした。

次に、青年部会費の見直しについて、現状の運営資金では今後の活動に支障を来す可能性があることを踏まえ、財政基盤の安定化および事業内容の向上を目指し、令和 8 年度より 1 盟友あたり 300 円の増額を実施することが正式に決定された。会費増額にあたり、今年度より青年大会におけるコンクール（手づくり看板や P R 動画）応募組織に対する助成額の増額を行い、経済的な負担軽減を図るとともに、積極的な挑戦を後押しするものとなることが期待される。

また、一般社団法人家の光協会の普及文化本部東日本普及文化局の巨海局次長より、J A グループの広報誌「地上」の普及推進について説明があった。「地上」とは、青年部を対象とした農業技術や経営の情報、全国の農業者の取り組みなどを紹介したものとなっている。今年度においても県内盟友の方々に購読を促進し、J A 青年組織が直面している課題について理解を深め、共有し、学びの機会としてほしい。また、もう一つの広報誌「家の光」が創刊 100 周年を迎え、記念企画としてダンスコンテスト（通称：家の光 100 ダン）が開催される。応募資格は J A 女性組織や J A 青年組織、J A 役職員等の『家の光』愛読者、その関係者及び知人と範囲が広く積極的な応募を呼び掛けていた。この機会をきっかけに、J A 青年組織の活動の活性化につなげていきたい。

本会議は、今後の青年部活動をより強化していくための大切な機会となり、参加者それぞれが自組織の課題と向き合いながら、地域農業の未来を担う若者の力を一層引き出していく決意を新たにした。

（中央会 農業対策部）



第 1 回県下 J A 青年部長・事務局合同会議の様子

実践 農業者支援

J A 営農指導事業機能・体制強化に向けて ～ヒアリング調査の結果～

1. はじめに

現在、J A の営農指導担当職員の総数は減少し、他業務との兼務化がすすんでいます。一方で、農業経営の大規模化や多様化、環境に配慮した持続的な農業経営など、営農指導員には高い専門性が求められています。これらの環境変化をふまえ、限られた要員で効果的・効率的に業務をすすめるため、J A 全中では、令和7年2月に営農指導事業をJ A の中核（コア）機能として、営農指導事業の機能・体制や人材育成の強化をめざす、「営農指導事業機能・体制強化方針」を改訂しました。

本県においても、新たな強化方針の策定に向け、営農指導事業に関するヒアリング調査を10J A で担当部課長を対象に実施しました。今回は調査結果の一部について紹介します。

2. 調査の概要

- (1) 調査時期・・・令和7年4月（5日間）
- (2) 調査方法・・・対面による聞き取り調査



3. 主な質問事項と回答

Q & A	
Q 1 営農指導事業の必要性がJ A 内で周知されているか。（営農指導事業の他部門への波及効果）	
A－〇指導事業が農産物の集荷や購買品の供給に直接繋がっているか検証できないため、周知されているか判断が難しい。集出荷施設の作業員となっている営農指導員も多い。	
〇周知はされていると思うが、波及効果があるとまではいえない。	
〇常勤役員が営農部門の必要性を理解している。	
〇肥料・農薬の実証試験等は情報共有し、協力体制を築いている。	
Q 2 地域農業振興計画等を踏まえた営農指導体制が取れているか。	
A－〇現状の業務に合わせた人員配置になっている。職員総数が減っている中、営農指導員は減少していない。	
〇出向く体制がとれていない。次世代の営農指導員の育成ができていない。	
〇限られた人員で業務に取り組むしかない。	
〇営農指導員の減少もあって理想的な体制とはなっていない。	
〇各地域毎に営農指導員を担当として配置し巡回させている。	
Q 3 営農指導部門（本店機能）と地区営農センター・支店担当の機能分担はあるか。	
A－〇支店、品目ごとに業務分担を決めている。	
〇支店（地区）の各課長が営農指導員の担当品目を決めている。	
〇業務の分担はあるが、支店には営農購買課として配属され、営農担当になるかは支店次第。	
〇特に本店業務・支店業務と切り分けていない。	

Q 4 宮農指導員の業務内容の把握、棚卸し（洗い出し・分類）ができていないか。

A－○業務の棚卸しは考えているが現状はできていない。

○宮農指導活動簿を作成して上席まで回覧することで業務の把握はできている。

○指導員一覧表で業務の見える化はしているが、実際には記載以外の業務も数多くある。

○業務一覧に担当者（責任者と担当者）を充てている。毎年度業務一覧（内容）は更新している。

Q 5 宮農指導員の負担となっている業務の改善に向けた検討、対策を行っているか。

A－○改善内容を検討し提案もしているが、実行に移せないところもある。

○月1回の定例会で検討している。

○業務改善を要望した経過があるが他部門にも影響があるので結果はでていない。

Q 6 宮農指導員のスキルアップのための育成環境が整備されているか。

A－○全体的な職員不足によってベテランと若手の組み合わせができていない。

○品目別担当としているため、人事ローテーション（異動）が難しくなっている。

○常にベテランと新人の2人で巡回する体制までないが、新人1人で巡回させることはない。

○プロジェクトチームを結成し、指導員の育成・課題解決に向けた取組みを実施している。

○品目担当者会議終了後に、ベテラン指導員が講習を開催するなどの取組を実施している。

○宮農指導新任者には2か月程、先輩指導員と巡回する体制をとっている。

Q 7 未利用・低利用の担い手に対する対策を実施できているか。

A－○担い手訪問は実施しているが、対策までは実施できていない。

○リストアップし目標効果額を設定し巡回している。

○担い手（法人）の会を作り、常勤役員を含めて意見交換を実施している。

○購買部門から未利用者リストをもらって巡回を実施したこともある。

○全農と連携し肥料農薬の推進を実施している。

○JAの利用状況が見える化し、平均以下の農家を巡回するなどの対応をしている。

Q 8 栽培技術の標準化に向け、宮農指導員間での情報を共有しているか。

A－○チーム会議を開催し情報共有しているが、品目によっては施設対応が忙しく情報共有できていない。

○定例会議や品目別講習会等で情報共有している。

○リンゴ指導協力員（技術に優れた中堅農家）が農家に出向き指導する取組みを実施している。

Q 9 GAP手法や環境に配慮した栽培指導ができていないか。

A－○GAPの普及・推進は実施している。法人の場合は行政（県）に直接相談に行くケースが多い。

○共防連でトヨタ式「カイゼン」を実施した。

○Jクレジットの実施によってJAを利用していない法人とのつながりができた。

○トレーサビリティの裏にクロコンチェックシート（書き方例）を添付した。

4. まとめ

調査では宮農指導事業の体制、人材育成について多くの課題が挙げられました。調査結果をもとに対策を検討し、県版宮農指導事業機能・体制強化方針を策定します。宮農指導員が本来行うべき業務に集中し、宮農指導事業機能を十分に発揮できる体制の構築を目指します。

（中央会 農業対策部）

経営の窓口

～自主（自店）検査の実効性確保に向けた見直しについて～

1. はじめに

自主検査は、総合的な監督指針等において極めて重要な取り組みと位置付けられていることから、これまでも内部統制システムの一環として取り組んできた。

しかし、繰り返される不祥事、社会規範の変化への対応から、さらなるＪＡ３線モデルの実効性向上を目的に自主検査の見直しが行われた。自主検査が抱えていたこれまでの課題を踏まえた見直し内容について紹介したい。

2. 現状の課題

自主検査は、事務ミス・不祥事等の早期発見に寄与しているが、その一方で以下に示す理由のために実効性に課題が生じていた。

① 負担感の増大

ＪＡの業務の高度化・複雑化に伴い、検査項目が肥大化していることにより、日常業務を行いながら十分な自主検査の実施が困難になっている。

② 検査の形骸化

自主検査で不備なしとした項目が、監査等で不備を指摘される例が生じている。

また、検出事項の原因を深く議論する場が不明瞭のため、検査実施者単独で対策を検討することになってしまい、表面的な対策しかとれない状態となっている。

③ 主体性の欠如

自主検査の趣旨や、項目毎のリスクが検査実施部署に伝わらず、職員にやらされ感がある。

また、不備事項対応について本店業務所管部の関与が希薄な場合がある。

さらに、検査項目のＪＡのリスク認識に基づく主体的な項目の加除ができない。

3. 具体的な見直し内容

① 主体的な検査項目の設定

ＪＡにおける検査項目の主体的な検討を促すため、チェックリストに項目の属性欄を追加し、「必須」と「任意」の二つに区分された。（下図色付が今回追加された部分）

業務領域	参照規程		事務所管部署	No	属性		検査項目
	規程類名称	条項または 該当ページ			必須	任意	

「任意」の項目については、ＪＡのリスクに応じて項目の削除・修正や頻度の削減が可能な項目となった。リスクの判断材料としては、対象事務に従事する人数、事務の事業量・処理件数、対象事務で過去不祥事が発生したかどうか、当該事務に対する内部統制の有効性等が例として考えられている。

また、「経済事業」において不祥事防止に特に資する重要項目には、「重要」である旨が明記された。

② 想定されるリスク欄の追加

検査実施者がより自主検査の趣旨・意義を理解するために、下図のようにチェックリストに検査項目の検出漏れが生じた場合に発生するリスクを例示する欄が追加になった。(下図色付が今回追加された部分)

業務領域	…	検査項目	想定されるリスク例	確認すべき帳票 (例)
集金	…	渉外等が組合員宅で現金を領収した場合、入金処理に関する証跡を確認する。	・ 組合員宅訪問時に、組合員から回収した現金を横領するリスク	・ 入金伝票 ・ 受取書、領収書 ・ 外商等の日報

③ 真因分析を行うための欄を追加

検査のPDCAを実践に資するようにチェックリスト確認結果欄の「課題」が細分化された。「課題」について「発生事象」、「発生原因」、「対策」を記入する欄に細分化することで、PDCAを回しやすくする形式に変更された。(下図色付が今回追加された部分)

確認結果						
確認日	結果	結果を確認できる 参照資料	発生事象 (×の理由を記載)	発生原因		対策
				分類	原因	

④ 本店業務所管部署の役割の明確化

不備事項について本店所管部の関与が希薄であったため、自主検査実施要領例において各事業の所管部とリスク管理部署と連携し、改善整備に取り組まなければならないこと等が定められた。

4. さいごに

要領やチェックリストの変更により、リスク分析に応じた項目の削除、修正が可能となった。これは、JAに主体的な検討を促すことで、現場のやらされ感や形骸化を防ぐことを目的としている。自主検査の所管部署とリスク管理部署の連携により実効性のある取り組みとなるよう本会でも支援していきたい。

(中央会 経営対策部)



ミニトマトの植え付け体験開催

6月6日、J A 青森羽白野菜集出荷施設内で、「令和7年度消費者交流会ミニトマトの植え付け体験」が開催された。

「東青の味加工産直ネットワーク」が企画したもので、青森県のホームページと青森市の広報で参加者を募集し、10組17人が参加。

「おいしいミニトマトを育てよう～プランター編～」として、講師は、J A 青森中央営農センター・藤田喜久雄センター長が務めた。

最初に、初心者でも育てやすいミニトマトの種類などを紹介し、資料を用いながら作業手順のポイントや注意点を説明。講師の説明に耳を傾け、資料を確認しながらメモをとっている参加者の姿も見られた。

続いて、土と元肥、堆肥、消石灰をスコップで混ぜ合わせて土づくりをし、プランターに入れた後、2本の苗を植え付けした。今回、植え付けしたのは、赤色系の「ひなりんご」と黄色系の「イエローミミ」の2種類。「土はもう少し入れた方がよいか」、「花の向きはこれでよいか」など確認しながら進められた。他にも、水や追肥のやり方など多くの質問があり、講師のわかりやすく丁寧な回答に感心する声が多くあった。

植え付け体験を終えた参加者は、収穫できる日を楽しみにしながらプランターを持ち帰った。



講師の説明を聴く参加者



参加者も一緒に土づくり



各々プランターに植え付け



子供たちもお手伝い



全面積直播栽培で 省力化を 部会のトップとして 先立ち

播種作業を行う葛西さん



J A つがる水稲部会は506人の部員数で構成し、品質向上や農業経営の安定化を図ることを目的に、定期的に講習会などを開催している。

部会長の葛西英治さん（55）は、水稲25㍓を栽培する大規模農家で、J A の米穀推進協議会の会長も務める。

葛西さんは27歳で就農し、今年で農家28年目。昨年は15㍓を移植栽培、10㍓を直播栽培で行ってきたが、今年から全面積を直播栽培に切り替えた。高齢化や人手不足、ビニールハウスのかけ替えのタイミングも重なったことで、全面積切り替えに挑戦した。

直播栽培には乾田栽培と湛水栽培があるが、葛西さんは湛水直播栽培が9割を占める。昨年までは6人で作業を行っていたが、今年は葛西さんと親戚2人だけで作業を行う。

今年の播種は5月16日～5月30日まで行った。種もみを鉄粉・焼石膏でコーティングする鉄コーティングを施し、水田の表面に機械点播した。播種量や出芽状況を目視で確認でき、表面の硬さにより鳥害も減少する。また、直播栽培にすることで、育苗作業や苗運搬が不要になり、省力化や軽労化が実現した。

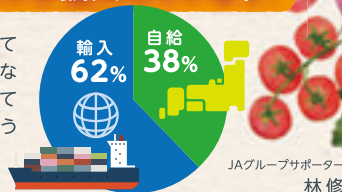
講習会などでは部会員同士の交流も盛んに行われ、直播栽培に興味をもつ生産者も増えているという。葛西さんは「直播栽培を行い、移植栽培と変わらない収量を上げることが目標だ。今後、乾田直播の節水型低コスト栽培を取り入れて、少しでも収量や収益を上げていきたい」と意気込んだ。

林修先生と学ぶ みんなの食料安全保障

世界情勢の激変で、日本の「食」のリスクが拡大しています。

日本の食料自給率は、わずか38%※。食料の約6割を、輸入に頼っているのです。そして今、日本の「食」は、ウクライナ情勢という新たなリスクに直面し、世界の食料価格の高騰に、さらに拍車がかかっています。「食料は、安く、いくらでも輸入できる」。そんな時代は、もう過去のものになったと言っても、過言ではないでしょう。

※2021年・カロリーベース



J A グループサポーター
林修

日本の「食」と「農」を支え、 未来につなぐ「国消国産」。

では、いざという時に食料が不足しないためにはどうすればよいのでしょうか。その答えを、J A グループは「国消国産」として提唱しています。「国消国産」とは、「国」民が必要として「消」費する食料は、できるだけ、その「国」で生「産」する、ということです。

生産資材の高騰が続く、日本の農業は 苦境に立たされています。

世界情勢の変化は今、農業の現場に、大きな問題をもたらしています。肥料、家畜の餌、燃料などの資材価格の高騰が、経営を直撃しているのです。このままでは農業を続けることが難しいという、生産者の皆さんの深刻な声も聞こえてきます。

適正な価格で「国消国産」を進める。 それが「みんなの食料安全保障」。

生産者を支え、日本の「食」を未来につなぐために、私たちもまた意識を変えていくことが求められています。できるだけ国産のものを手に取り、食べることが、私たちにできる「国消国産」の実践であり、日本の生産者を応援することにつながります。それが私たち「みんなにできる食料安全保障」と言えるでしょう。



耕そう、大地と地域の未来。JAグループ



農林中央金庫 青森支店
JAリテール企画班
木村 史勇留 さん

輝き

●プロフィール

2024年4月から勤務 京都府京都市出身 24歳

— 働くきっかけは？ —

学生時代に地元で農業に携わるなかで、広く農業者を支援し日本の第一次産業の発展に貢献したいと考えようになりました。全国のJAと支えあい、様々なステークホルダーの方々と共に農林水産業を経営面から支える金庫の事業に魅力を感じ入庫しました。

— 業務内容を教えて下さい。 —

主に付帯取引（年金・給振・JAカード・IB・アプリ等）の担当として、各種商品の企画・推進業務を担っています。他にも、地域活性化取組の推進や相続相談にかかる取組みも行っています。

— 働いた感想は？ —

業務で必要となる知識が想像以上に多いことに驚きました。JAからの照会をつづじて初めて知ることも多くあるため、日々勉強を重ねアップデートしていかなければいけないと痛感しています。

— 仕事をする上で、日頃心がけていることは？ —

業務に対して食べず嫌いをしないようにしています。一見、自身の担当業務と関わりがないように見えても意外なところでつながっていたりするのでどんな業務・照会にも全力で取組むようにしています。

— 特技・趣味は？ —

休みの日は、青森の美味しい食を求め県内各地を巡っています。ウニが好物で近々ウニ祭りが開催されると耳にしたので行ってみようと思っています。

— あなたが自慢できることは？ —

ウィンタースポーツ（スキー・スノーボード）には自信があります。昔、アルペンを競技として行っていました。

— 将来の夢は？ —

業務では、金庫内外の方々から一番初めに相談されるような職員になりたいです。プライベートでは、万博に行ったことがなく一度行ってみたいと思っていましたので現在、大阪で開催されている万博に行きたいです。

JA人の動き

○JAつがる弘前（令和7年6月26日付）

代表理事組合長	天 内 正 博（再）
代表理事専務	太 田 俊 逸（新）
代表理事常務	丸 岡 義 昭（再）
信用担当常務	幸 山 昌 章（新）
代表幹事	福 士 孝（新）
常勤監事	中 田 拓 彦（再）

○JA八戸（令和7年6月26日付）

代表理事組合長	若 林 政 秀（新）
代表理事専務	木 村 照 男（新）
代表理事常務（信用担当専任）	下 村 正 男（新）
代表理事常務（営農経済担当）	金 澤 幹 雄（新）
代表幹事	久 保 信 明（再）
常勤監事	中 澤 裕（再）

新風

J A 八戸

五戸町

村下和哉さん

五戸町倉石又重で農業を営む村下和哉さん（38）は、新規就農して7年目の若手農家。20アールの圃場でピーマン2,200本を栽培している。3年前に兼業農家から専業農家となった。村下さんは「働きながら農家をしていたときは、最低限の管理しかできなかった。専業となってからは手をかける時間も長くなり、ピーマンの生りや出来が良くなった。今年はセルトレイ苗をポットへ移植し、育苗から挑戦したので出来栄が楽しみだ」と語る。

土づくりにこだわっている村下さん。

作付け圃場は、もともと田んぼだったこともあり排水性に気を付け、連作障害にならないよう努めている。堆肥や米ぬかなどを混ぜ込むなど、J Aの指導員から知識を得たり、本を読んで実践している。研修会にも参加し、自分より収量がある生産者の圃場を見たり、聞いたりするのは楽しいし学ぶことが多く自身の圃場にも取り入れられるか考えているそうだ。

村下さんは「家族で経営しているので面積拡大は考えていない。お盆過ぎから9月いっぱいはいは休みなしで収穫の毎日だが、収入につながるので嬉しい。1株1株、質や量にこだわり今後も頑張りたい」と意気込みを見せる。



生育状況を確認する村下さん

後編 記集

夏本番を迎え、最高気温が30度前後の日も多くなってきました。あまりに暑すぎると、農作物の生育に影響します。夏とはいえ、ほどほどの暑さで。



最近、深浦町に行く機会があったのですが、あいにくの雨でした。時化の海を見ながら「BEACH HOUSE」で休憩。生シェイクのマンゴーをいただきました。道中には「千畳敷海岸」があり、晴れなら海が綺麗なので皆さんも暑気払いに行ってみてはいかがでしょうか。

それでは皆様、「Have a nice July!」（克）



ホームページアドレス

- J A 青森中央会 <https://www.ja-aomori.or.jp/chuoukai/>
イベントの様子、歳時記、産直・J A 情報などをご覧ください。
- J A バンク青森 <https://aomori.jabank.org/>
商品・サービスのご案内のほか、マネーシミュレーションや全国のJ A バンクへのリンク等をご覧ください。
- J A 全農あおもり <https://www.zennoh.or.jp/am/>
生産量日本一のりんご・にんにく・ごぼうをはじめとした農畜産物情報や活動状況、中古農機情報を紹介しております。
- J A 共済連青森 <https://www.jakyosai-aomori.jp>
J A 共済のご案内のほか、地域貢献活動の取組を紹介しております。

日本農業新聞
電子版が

アプリでさらに便利に!

日本農業新聞ニュースアプリ

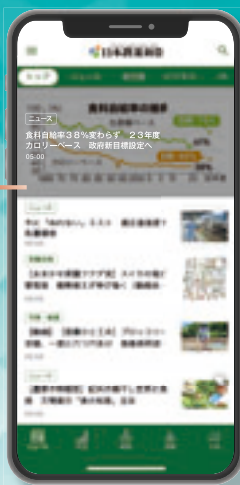


その日の記事を
すぐにチェック

最新の記事は
トップに大きく掲
載されます。読み
込み速度も速く、
読みたい記事に
すぐにアクセスで
きます。



※画面はイメージです



速報などを
プッシュ通知で
お知らせします。



＼ スワイプで移動 /



カテゴリメニュー
がスワイプで簡単
に選択できます。

長押し+スライド
で読みたい順に並
び替えもできます。



カテゴリ記事に
簡単アクセス

動画で操作方法など説明

アプリへのログイン方法や特長
など、詳しい説明をご覧ください
ます。



アプリをダウンロードする

日本農業新聞公式ウェブサイ
トからダウンロードにお進み
いただけます。



お問い合わせ

日本農業新聞 電子版事務局
dkanri@agrnews.co.jp

※ アプリのダウンロードには「Apple ID」または「Googleアカウント」が必要となります。 ※ App StoreはApple Inc.のサービスマークです。 ※ AndroidはGoogle Inc.の登録商標です。

家の光

IE no HIKARI

「食と農」「暮らし」「協同」「家族」を柱に
「人生100年時代」の元気づくりを応援していきます!



読者に寄り添い
より身近で活用しやすく



お申し込みはお近くのJAへ

誌名	2025年 8月号までの定価(税込)		9月号からの 新定価(税込) ※毎号統一価格
	普通月号	629円	
家の光 IE no HIKARI	特別月号(1・4・5・7・9月号)	922円	900円
	12月特別号	1,027円	

JAグループ 家の光協会 〒162-8448 東京都新宿区市谷船河原町11 TEL 03-3266-9039 <https://www.ienohikari.net/>